

北海道の開拓と薩摩の人々

明治政府は、日本の新天地として北海道を開拓できるように、「開拓使」という役所をつくりました。外国から優れた技術や知識を持つ専門家を招いて道路や鉄道を整備したり、近代的な農業をはじめたり、田畑を耕しながら防衛する「屯田兵」という制度もつくりました。

全国各地からたくさんの方が北海道の開拓のためにやって来ました。北海道へ移り住んだ人が一番多いのは青森県、炭鉱労働者では秋田県、農業では富山県、石川県から来た人が多くいました。こうした道外から来た人たちが、ずっと前から北海道で暮らしていたアイヌの人たちの力がいまの北海道につながっています。そして、薩摩とのつながりもありました。江戸時代の薩摩藩とはいまの鹿児島県です。日本最南端の藩で、ロシア、イギリス、フランス、アメリカなどの船が近くにやって来るたび、日本も外国と対等な力を持たなければいけないと考えました。大きな船やガラス製品などをつくる近代的な工場を薩摩に建てた経験をいかし、北海道の開拓のためにも役立てようと思いました。



島津 齊彬（1809～1858）
第11代薩摩藩主 島津家第28代当主
造船、大砲・ガラス製造や紡績などの
日本初の近代工場群「集成館」を
鹿児島につくりました。

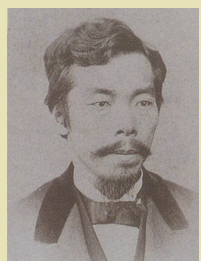
〈北海道と関わりの深い薩摩人〉



黒田 清隆（1840～1900）
第3代目の北海道開拓長官をつとめ、北海道開拓の指揮をとりました。



西郷 従道（1843～1902）
西郷隆盛の弟で、4代目の北海道開拓長官となりました。



堀 基（1844～1912）
開拓使の役人をつとめた後、北海道炭鉄道をつくりました。



村橋 久成（1840～1892）
開拓使に入り、麦酒製造所（サツポロビールの前身）をつくるために働きました。



永山 武四郎（1837～1904）
屯田兵制度を取り入れ、のちに第2代目の北海道長官をつとめました。



調所 広文（1840～1911）
札幌農学校（いまの北海道大学）の初代校長をつとめました。